

Kappa Novels



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りください。このほかに、「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないように願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽二の十二の十三

光文社

神吉晴夫

連作時代小説 お耳役 檜十三郎捕物帖

ひのきじゆうざおろう とりものちよう

昭和42年6月1日 初版発行

検印廃止 ￥260

著者 島田一男
東京都新宿区余丁町4
発行者 神吉晴夫
印刷者 堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Kazuo Shimada 1967

連作時代小説

お耳役

ひのき

とりものちょう

檜十三郎捕物帖

しまだかずお

島田一男



カッパ・ノベルス

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

〈第一話〉	妾腹 <small>しやうぶ</small> 丁半 <small>ちやうはん</small>	5
〈第二話〉	三角屋敷	24
〈第三話〉	狂恋 <small>が</small> 河岸 <small>がし</small>	44
〈第四話〉	大名馬鹿 <small>は</small>	63
〈第五話〉	女腹切り	82
〈第六話〉	小判夜叉 <small>やしよ</small>	101
〈第七話〉	女駕籠 <small>かご</small> 騷動	120
〈第八話〉	切り髪 <small>ざん</small> 懺悔 <small>げ</small>	136
〈第九話〉	女忍 <small>にやん</small> 無情	155
〈第十話〉	椎 <small>い</small> ノ木 <small>き</small> 女房	174
〈第十一話〉	お国御前	193

本文のイラスト

村^{むら}

上^{かみ}

豊^{ゆたか}

〈第一話〉

妾腹しやうふく丁半ちやうはん

1

「——檜ひのきか？」

唐紙からかみの向こうから田たノ内伊織うちいおりの不機嫌な声が聞こえた。——ククッ……と、噛み殺した女の忍び笑いも、鋭い檜しゅうざざらう十三郎じゅうざざらうの耳はとらえている。

柳橋薬研堀やげんぼりのお留守居茶屋るすい「浮舟うきふね」の離れ座敷は、床ゆか下から大川おおかわの水音が聞こえて来る凝こった造作だった。ここで、各藩の留守居役たちが毎夜のように、勝手気ままな楽しみに溺れているのだ。

「はあ……お迎えをいただきましたが……」

「呼んだよ。しかし、いまちよいと都合が悪い……。わかるだろ？」

——クスッ……と、また女が忍び笑いを漏らした。

——女は伊織に抱きしめられているに違いない。もしかすると、伊織と女——たぶん芸者であろう……、二人は素っ裸なのかもしれない。水無月みなづきも末の江戸は——ことに大川端は、じっとしていても汗ばむほどむし暑い……。

「このままで結構です……」

十三郎が、静かに答えた。

「そうか。では、かんべんしてくれ。ところで檜、今夜の留守居役寄り合いで、またまた天降りあまくだの噂があると聞いた」

「聞いております」

「ほう……。さすがは役目から、早いな」

「いや、本日夕刻、耳にしましたばかり……。田ノ内さまへお話し申し上げようと思うておりましたが、お帰りがないので……」

「ふむ、毎夜のように寄り合い続きでな。これが留守居の役目だからしようがないようなものだが……」

「ご苦労なことと思っております」

「ハハハ……。皮肉か？」

四枚並んだ唐紙かみかみの端が、そっと動いて、白い手が、盆にのせた徳利と湯呑みを押し出し、ひっそりと引っこんだ。——女の腕は肘ひじのあたりまで眺められた。内側に、ぼつちり、木の葉のような淡いあざがついている。思ったとおり、女は裸なのであろう。

「酌しやくがなくて悪いな」

「結構です」

「ここに、女がひとりいるにはいるのだが……」

「自ままにいただきます」

十三郎は、盆を引き寄せ、湯呑みに酒をついだ。

「天降りあまくだの話だが、お名を盛姫もりひめさまと申すおかたと聞いたが……」

「はい。……上さまうさま三十番目のお子さまです。お腹はお八重やえの方さま。お年は十六歳。ご器量はまずまず……」

「大奥から流れる噂でまずまずというと、大してべっぴんではないな。十人並みでも絶世の美人と言われるのが將軍家の姫君さまだ」

「年額三千両の持参金と米百俵のお化粧料が付くのとこのとです」

「年三千両に米百俵!? とんでもない! 姫さまのお輿こし入れともなれば、大奥の女中どもが五十人はついて来よう。新規に御殿も建てねばならぬ」

「そのうえ、前例により、老中方より厳しいご下知げちがあることでしょう。——姫さま御おんため第一に存じたてまつり、ご奉公油断あるまじきこと……などと」

「そのこと、そのこと! そんな嫁御寮を押しつけられた大名こそ貧乏くじ——」

「ところが……」

「なにっ!？」

がばっと、跳ね起きる気配が感じられた。——伊織は
いままで、横になって話していたらしい。

「檜……。十三郎……」

「はい……」

「わしの勘違いかな？」

「いいえ……。たぶん、お留守居の勘は当たっておりま
しょう」

「では……。わが秋田藩へ天降り……。まさかっ……」

「老中がたのご相談の節、名前の出た大名はただ二つ

——」

「二つが、わが藩と言うのか？」

「はい……」

「もう一つは？」

「佐賀藩……」

「鍋島家かっ!？」

「はい……」

「そうかあ……」

伊織は、ほっとしたように、大きく溜息をついたよう

だ。

「佐賀は大大名だ」

「はい。三十五万七千石です。しかし、わが秋田藩も大
大名です」

「いやいや……。わが藩は二十万五千八百石……。どう
せむりやり天降らせるなれば、大金持ちのほうがいかに
きまっている。それが親心、人情というものだ」

「ところが、鍋島侯には御実子がなく、肥前蓮池のご分
家から養子をお迎えになりました。正丸君と申すおかた
です」

「蓮池というと、鍋島摂津守どの、五万二千石のお家だ
な……。その正丸どのに盛姫をめあわせる。ちょうどよ
いではないか」

「正丸君は、当年五歳です。盛姫さまは十六歳……」

「かまわぬかまわぬー 男と女であればよいのだ。年な
ど幾つでもかまわぬ。現に、加賀の前田家へゆかれた溶
姫は五歳。婿どののは二十一歳だ」

「しかし……」

「檜……。取越し苦勞ではないかな？」

「鍋島家中屋敷のある女性の腹にお子が——」

「十三郎っ！」

伊織が、声を低めた——

「鍋島侯のお子か！」

「はい……。側室おちいの方……。駆け引きなしの美人だということですよ」

「大名が妾にするくらいに女だ。べっぴんにきまっていますよ」

「もし、その妾腹のお子が女子の場合、正丸どのとめあわせる……と、鍋島侯は申されているそうです」

「それは内々のことであろう。老中がた、ことに筆頭の水野出羽守さまは、さようなことに耳を傾けるおかたではない。こうと決めたことは、びしびしおやりになるおからだ」

「内々のことではありません。一昨日、老中大久保加賀守さま、若年寄小笠原相模守さま、同じく堀大和守さまのお三かたを、有明の海でとれた鯛料理におまねきになりました。その席上——」

「側室おちいの方の、せり出した腹のことを話したと申すのか？」

「はい……」

「間違いではあるまいな？」

檜十三郎は、閉じられたままの唐紙に向かって、にっこり笑った。

「わたくしは、お耳役ですよ」

「間違っではおらぬと言うのか？」

「耳にしたこと、見たことをそのまま申し上げては、その判断は、お留守居におまかせします」

「わかった……」

伊織はしばらく、口をつぐんだ。その間に、十三郎は、湯呑みの酒を、静かに呑みほした。

と、出し抜けに、伊織が大きな声で笑った——

「檜……。さうや大笑いだ」

「おちいの方の腹のお子は、男かもしれぬ……とおっしゃるのでしよう」

「そのとおりだ。子どもは、オギャアと泣くまで、男か女かわからぬ」

「生まれるか生まれぬかもわかりません」

「えっ!？」

伊織がごくりと生唾を呑みこんだようだ。

「あー、さうか……。流れることもあるわけか。いま、

幾月かな？」

「八月あまり……と聞きました」

「ふーむ……。そこまで育てば、まず流れはすまい……。さて、子が生まれる……。女であった……とすると」

「盛姫さまは、わが秋田藩へ天降ることになるかもしれないませぬな」

「それは困る！」

伊織が、立って、着物を着始めたようだ。

「お留守居……」

「いま、そちらへ行く」

「いやいや……。せっかくのところ、どうぞそのまま……。わたくしが聞き込みましたことはすべて申し上げました。これで、引き取らせていただきます」

「そうか、ちょっと待ってくれ……」

しばらくすると、また唐紙の端が、小さなあざのある白い腕が、そっと、紙包みを差し出した。

「檜……」

「はい……」

「なにかと費用がかかろう？」

「はい……。とくに今夜は、金が入用です」

「どこへ行くのだ？」

「老中阿部備中守さま上屋敷の中間部屋に、賭場が立ちます」

「博突か？」

「はい……。大名屋敷出入りの中間や人足どもが集まります。お耳役にとつては、逃がせぬところです」

「十両包んでおいたが……」

「いただいで参ります……」

檜十三郎は、金包みをふところへ納めると、唐紙へ向かって丁寧に頭を下げた——

「——では、ごゆるりと……」

2

三十分後に、檜十三郎は、神田明神下の女師匠投げ節お千の家にはいって行った。

「——おや、お帰りなさい……」

台所から手を拭きながら出て来たお千が、十三郎を見てにっこり笑った。

——おかしな女だ……と、十三郎は腹の中で苦笑いを

する。

お千のからだを知って一年半になる。月に五、六度——五日おき、六日おきに来るのだが、お千はけっして——いらっしやいませ……とは言わない。いつも——お帰りなさい……だ。

「——湯へ行って来たのか？」

十三郎は、お千の胸へ顔を近づけて、鼻を動かした。

「今夜あたり逢えると思ったので……、匂う？」

「いい匂いだが、投げ節のお師匠さんが、暗くなつて湯へ行くとは、ちよいと野暮やぼったくはないかな？」

「だって……。いいんですよ、野暮で」

そう言うとお千が、ポツと頬を赤くした。

「む？ あー、そうか……」

「まー いやな十三さん！ あー、そうか……だなんて」

これは、二人にだけわかる閨わがやの内証ごとだった。

檜十三郎……。父祖代々の秋田藩士だ。本年二十七歳だが、三代統いての江戸詰めで、出羽侍の泥臭さはかけらも残していなかったし、年に似合わず、女の急所、責めどころは隅々まで心得ていた。

十三郎がお千を抱くと、まず小半刻（一時間）は責め続ける。手で、舌で、そしてからだ全部で……。

お千は二十三歳……。これまで幾人かの男を知っているが、十三郎に比べると、みんな子どもだ。

——今夜もいじめられたい……。

だからお千は、わざと遅く湯へ行き、どこへ口をつけられてもよいように、からだを洗い清めて来たのだが……。

「悪いが、楽しみはあと回しだ」

「どこかへお出かけかい？」

「ドテ金きんを呼んで来てくれ……」

「じれったいね！ 六日ぶりなのに……。あまり放つとくと、浮気をするよ」

「いいだろう。金八きんぱちを呼びに行ったついでに、手ごろな相手をくわ啜くえて来な」

「まー 泥棒猫が魚の骨を拾って来るみたいな言いかた……。どうして、こんな薄情者に惚れちゃったのだろう……」

お千が出て行くと、十三郎はかってに押入れから着物を取り出して着替えた。

しばらくして、柳原土堤の金八ことドテ金と呼ばれる小博突打ちと十三郎は、神田川沿いの道をたどっていた。

素肌ひとよに単衣……。ちよいと胸のあたりをくつろげた姿は、まずまず大根畑あたりの貧乏御家人か、ひいき目に見ても、身を持ち崩した小旗本の次男坊というところである。

「金八、おまえ、阿部屋敷の賭場に顔が通っているのか？」

「はばかりながら土堤どての金八でさあ。ここいらの屋敷で、あたしの顔をしらねえ中間ちゅうかんがいたら、そいつはモグリか駆け出しでさあ。しかし旦那だんな……。阿部さまの中間部屋は、勝負が大きいんですわねえ」

「十両では足りぬか？」

「十両!? そんなにスツチャ大ごとですよ」

「おれは、勝つつもりだ」

「敗けるつもりで賭場へ行くやつはいませんよ。それにしても、檜の旦那のことだ。どうせお役目で、何かお耳へ仕入れたいんでしょ？」

「阿部備中守さまはご老中だからな。何か拾いものがある

るかもしれぬ」

「ご老中は、阿部さまだけじゃねえですぜ」

「老中筆頭の水野出羽守さまお屋敷は辰たちの口北角、月番老中三人のうち、大久保加賀守さまお屋敷は同じく辰の口の南角、松平和泉守いずみかみさまは大名小路……。まさか、辰の口や大名小路で賭場を開くわけにはゆくまい……」

「なるほど……。残る月番老中は、阿部さまだけというわけですか……。そこまで気を使わなきゃならないとは、お耳役って、たいへんなお仕事ですねえ」

お耳役……。そんな役名は、どの藩の職制にもものっていない。しかも、あらゆる大名の江戸屋敷には、この役目を持たされる心きいた家来が一人二人はいたものである。

大名の江戸屋敷同士のつきあいは、留守居役の仕事だった。毎日、毎夜、幾人かの留守居役が集まって、さりげなく情報を交換する。そのために、留守居役の集まりのための料亭——お留守居茶屋が、大川端筋を中心に、神田、浅草、本所、深川に三十数軒もできていた。中で「浮舟」などは、格もよく、集まる留守居役も、大藩のものが多かった。

お耳役は、いかなければ留守居役の見る目嗅ぐ鼻だった。——留守居役は、お耳役が集めた情報を握って、幕府との交渉、他藩とのつき合いに、手落ちのないよう、早目に適切な手を打たねばならなかった。

たとえば、大名にとって、土木工事を押しつけられることは、たいへんな出費である。もしお耳役が、——今度あたり、自分の藩に役目が回ってきそうだ……との情報をつかんだとする。そのことをただちに留守居役へ知らせる。留守居役は、さっそく老中から若年寄、さらに作事奉行にまで手を回して金品を贈り、この役目を逃げる工作をするのだ。

このところ、各藩留守居役の頭痛のたねは、將軍家の若君、姫君の天降りだった。

なにしろ、十一代將軍家斉は、このうえもない女好きで、御台所おんたいしよのほかにお部屋さまを二十一人も持っていた。このほか、風呂場でつまんだ女や、庭のあずま屋で押し倒した奥女中などは、数え切れないほど……。

表面にあらわれた二十一人の側室わきしつにうつつを抜かした家斉の子は、男子二十五人、女子二十九人、つごう五十人……。まことに前代未聞の色ごと師、子福者だった

のである。

ところで、家斉は生みっ放したが、天下のまつりごとをとる老中たちが、このあと始末をせねばならなかった。

いかに將軍のお子さまでも、こうやたらにつくられたのでは、できのよいのばかりというわけにはゆかない。——十七番目の鈴姫すずひめはお脳が弱かったし、三十五番目の玉姫たまひめは口がきけなかった。また四十八番目の千三郎君せんざぶろうきみは生まれながらの盲目だったし、五十三番目の周丸君しゅうまるきみはてんかん持ちだ……。

それでも將軍家の若君、姫君である以上、一生飼いかしというわけにはゆかない。年ごろになれば、男には女を、女には男をあてがわねばならない。それも、町人百姓の息子や娘ではだめだ。そこで、婿入り、嫁入りという形で、大名たちに押しつける。

——將軍家格別のおほしめしによって……とまったくぶって、ほしくもない婿どのや花嫁御寮が天降って来る……。天降られた大名こそ災難だ。贅ぜいを尽くした新御殿を建てて迎えねばならない。お婿さんには百人からの家来がついて来る。お嫁さんでも、五十人以上の奥女中が

へばりついている。これを養わねばならないのである。御三家の尾張、紀伊、水戸はもとより、加賀の前田家、仙台の伊達家、越前、会津、高松、松江の各松平家、徳島の蜂須賀家、萩の毛利家、広島、松野家など、めぼしい大名は、すでに天降られている。これからぼちぼち佐賀の鍋島家、福岡の黒田家、秋田の佐竹家などが狙われる番になっていたので。

したがって、留守居役たちはこのところ、天降りを防ぐために、大奥や老中の動きを握ろうと、やっきになっている。

それにともなつて、お耳役もせわしくなる……というわけである。

「旦那とおつきあいして、二年になりますね？」

「そうか……。お千を知るより先であったかな」

「いやだなあ。お千さんのところへあたしが投げ節を習いに行つて、いつだか旦那をお連れしたら、とたんに旦那はお千さんが気にいって——」

「ハハハ……。気にいったのは、お千のからだを知つてからだ」

「かなわねえなあ、そう手放しじゃ……。わかつてます。

旦那は、網を張りたかつたんでしよう、お千さんところは、明神下の芸者衆が大勢出入りしてますから」

十三郎は、にやりと口もとを崩した。——実は金八の言うとおりだったのだ。十三郎には、奇妙な知り合いが多い。博奕打ちの土堤の金八を始め、読み売り屋、かごかき、人足口入れ稼業の元締め、たいこ持ち、さらに町道場を開いている武芸者、町方奉行所の同心、お城勤めのお数寄屋坊主、大奥出入りの女按摩や取上げ婆……。すべては、役に立つ話を集めるために役立つものばかりである。

「一度、旦那にうかがおうと思つてたんですがねえ、お耳役つてえのは、いつからのお役なんです？」

「親父の時からだ」

「では、代々のお耳役で？」

「いや……。代々のお役は江戸屋敷詰めの目付なのだが、どうやら早耳のほうに合っているらしい」

話しながら、十三郎と金八は、昌平橋にかかった。

橋を渡れば八辻が原……。

すつ……と、お高祖頭巾の女が、十三郎と金八を追い越して行った。

「うーん……」

金八が目を閉じ、鼻を突き出して首を振った。

「畜生っ、いい匂いだ」

「金八……」

「え？」

金八は、目を開いて十三郎が指さすほうを見詰めた。

「おや！」

女が、大名屋敷の脇門をくぐって行く。

「旦那！　ありゃあ、阿部さまのお屋敷ですぜ……」

3

そのお高祖頭巾と十三郎が、さしで向き合っていた。

壺を握ったまわし一本の男は、水を浴びたように汗びっしょりになっている。

部屋頭の富蔵がじらとみせうを始め、賭場に集まっていたものはすべて、十三郎と女をとり巻いてじっと息を呑んでいた。

十三郎と金八がこの阿部屋敷の中間部屋ちゆうかんげんへはいつて、「刻半（三時間）はたつていよう。」

始めのうちは格別のことはなかった。丁と半とのサイ

の目に勝負が争われ、十三郎はさりげなく、集まっている阿部屋敷の中間たちの話を盗み聞きしようとしていた。

その中に混じっていたお高祖頭巾の女と十三郎は、いつのころからか、真正面からぶつかり、張り合うようになつていたので。

十三郎には、なぜそうなつたのか、わからなかった。考えてみると、十三郎は女を意識していなかったが、女は、始めから、十三郎の反対へ張り続けていたようである。十三郎が丁目へ張れば女は半目へ……。十三郎が半目へ張ると女は丁目へ……。

勝負は、どういうものか、十三郎が勝ち続けていた。十三郎の膝の前には、もう三百両ほどの駒札こまざが集まっている。

中ごろから女は意地になり、倍……倍……と張つて来た。

ひと勝負十両となると、もう中間たちには手が出せない。いつか、ほかのものは手を引き、いまは十三郎と女だけ……。しかも、張った駒は、二百両になつていた。

「勝負っ！」



壺振りが、さっと壺を引いた。

うっ……と、まわりのものが息を呑む！ また十三郎の勝ちだ。

「部屋頭っ！」

女が、キッと富蔵を振り返った。

「まただよっ！ いやんなっちゃう」

「運がねえんだなあ。相手のお侍は始めてのお客だし、壺を振ってるのはこの部屋に三年もいる安吉だ。イカサマはねえよ」

「とんでもない。あたしヤイカサマなんて言っちゃいな
い……。三百両、駒を回しておくんなさい」

「お蝶さん……。悪いことは言わねえ。今夜はもうやめなせえ」

「部屋頭、天人お蝶に、このまま引きさがれって言うのかい？」

お蝶と呼ばれた女は、両袖を二の腕までまくり、片膝を立てて、富蔵を睨みつけた。

「いいよ……。駒を回してくれなきゃあ、ほかのもので勝負をするから」

「ほかのもので!？」